

◆優 良 賞◆

シーサー

土沢中学校 一年

安池佳子

私のひいおじいちゃんは、戦争経験者です。

今年は、戦争が終わって八十年の節目の年です。テレビでは、戦争を知る人たちの証言や、当時の映像が多く紹介されました。

その時、私のひいおじいちゃんの話題になりました。父が、「ひいおじいちゃんは、太平洋戦争の時、沖縄の宮古島に兵士として行っていたんだよ。」と話してくれました。私はそれを初めて知り、とても驚きました。

私は、急に戦争が身近なことと感じました。

玄関にある古いシーサーの置物は、ひいおじいちゃんがお参りのために宮古島を訪れたとき、沖縄の友人からもらつたものでした。

家の玄関にずっと置かれている、色あせたシーサーは、ただの置物だと思っていましたが、そこには、深い意味があることを知りました。

ひいおじいちゃんは、沖縄の人と友情を深め、戦後に再び宮古島を訪れたときに、その証としてシーサーを受けとりました。私の家にあるシーサーは、家族の歴史を伝える存在です。

ひいおじいちゃんが宮古島で見た景色や、出会った人たち、交わした言葉などが目に見えない形で込められています。私には想像しきれない強い絆を感じました。

戦争を体験した人達は年々少くなり、直接話を聞ける機会はほぼありません。私のひいおじいちゃんも私が生まれる前に亡くなり、直接話をしましたことはありません。戦争の記憶が薄れているとテレビでは紹介されていました。しかし、私の家には、戦争と平和の象徴ともいえる物があると知ったとき、その言葉が急に自分ごとになりました。

私が当たり前だと思っていた生活は、戦争中には存在しなかつたものであり、簡単に壊れてしまうものです。もし私がその時代に生きていたら、家族や友達は無事でいられたでしょうか。考えるだけで胸が苦しくなります。

今、世界の様々な場所でおきている戦争が身近なものに感じられ、私が当たり前だと思っている日常は特別なものだと感じました。

記憶は時間とともに薄れます。しかし、完全に消えてしまふ前に受け取り、次の世代へとつないでいくことはできます。学校の授業だけでなく、家族の会話や、身近な物を通しても可能です。私にとって、シーサーがまさにその役割を果たしています。

これから私は、このシーサーを見るたびに、ひいおじいちゃんが宮古島で過ごした日々と、宮古島の人たちと築いた友情を思い出すでしょう。そして、直接会ったことがなくとも、その思いを胸に刻み、平和な日本であることを願い続けます。